

OB・OG 通信

2つの挑戦と1つの敗北、諦めることも大事なのだ —改めて、多くの力を借りて生きる—

第1期 OB 井川 倫士

こんにちは。毎度おなじみ1期の問題児、井川です。昨年に引き続き、このゼミの寄稿文を書いています。今年は締切りに...間に合いませんでした。ごめんなさい。さて毎回のことですが、近況報告、最近心掛けていること、野望、そして自分への戒めとメッセージを送りたいと思います。

◆茨城県議会議員選挙に挑戦：政治家の意識、有権者の認識

前回の寄稿文に書かせて頂いた通り、昨年2022年12月2日告示、同月11日投票の茨城県議会議員選挙に、「次代のために道を切り開きたい」と考え、挑戦させてもらいました。その理由は...昨年のOB・OG冊子を参照のこと。

結論を言えば、10,299票という多くの票を得るも523票差で次点落選。ゼミのOB・OG生から頂いた浄財を活かし切れずに、本当に申し訳ないです。改めて、寄付を頂き本当にありがとうございました。事前の予想通り、一連の活動費に約1,000万円の資金が掛かりました。私にとっては、大金を投入しての挑戦でしたが、残念な結果に。しかしながら、投票用紙へ10,000人以上の方からフルネーム（少なくとも「井川」と）を書いて頂いたことには、感謝、感謝です。そして、12月11日は妻の誕生日でもありました。ダブルでお祝い出来なくて、ごめん。なかなかドラマの様にはいきませんでした。

7年3ヶ月の銚田市議会議員として、自分なりに結構な実績を上げており、評価もされていると思っていましたが、そう甘くはなかった。知名度が足りず、実績についての発信も不足というのが事実。ちなみに相手候補は、78歳元職の元自民党県連幹事長のTさんと、69歳自民党の現職のHさんでした。Tさんがトップ当選で返り咲くことになりました。今回、何よりも衝撃の事実だったのは、この78歳の方の実績に関する有権者の認識でした。

有権者：「Tさんは、長いこと県議会議員をやって来たから実績がすごいよね」

私：「ちなみにTさんの実績って具体的に何ですか？」

有権者：「議員を7期務めていること...」

私：「...」

議員を長くやっていることがステータス...。これは政治家本人の話だと考えていましたが、それだけではなく有権者サイドも同じ様に思っていたのです。これには衝撃が走るとともに、何度も同様なやり取りをした結果、これが有権者の認識なのだと思います。長く生きている人に対抗するために、これほど不利な仕組みや考えが蔓延していることに改めてびっくりさせられました。この幻のような壁を今回は破ることが出来ませんでした。

◆市議会議員として抱いた危機感：田舎の子ども達の危機？

「今後はどうするの？」「4年後も挑戦してよ...」「次は市長選に出てよ...」このようなありがたい言葉を多くの方から掛けてもらいます。私は、「少しゆっくり考えさせてもらいたいです」と答えている。こう答える理由は2つ。

1つは、正直、次の選挙に挑戦するだけの資金を集められる自信が無い。だから、「次も挑戦します」と軽はずみな発言が出来ないで居ます。むしろそうであっても、はっきり「次も挑戦します」と言っておいた方が、応援してくれる人は増えるのかも知れません。しかし自分の性格ではそうは出来ない。この辺りが、私の限界なのだ。

2つ目は、地域のために貢献すること、地域を良くすることは政治家という肩書が無くても実行可能であるからだ。地域に生きる多くの人たちと接する中で、改めて市井に生きる人の強さを知った。だから私は余り政治家で居ることにこだわりが無い。この点も、私が今回の選挙に勝ち切れなかった原因なのかも知れない。

7年の月日を市議会議員として過ごさせて頂く中で、大きな危機感を持つようになったことがある。それは、『田舎の子どもは、総じて言えば、そう遠くない未来に都会の子ども達に何1つ勝てなくなるのではないか』という問題だ。少子化で近所に同世代の子どもが居ない。だから外遊びをしないし、友達と遊ぶ時さえ送迎付き。学校から家が遠いので、両親は勿論、暇を持って余したおじいちゃん、おばあちゃんが送り迎えをしている。海に面した自治体でも、何年も海に行かない。自然体験は、都会のアクティブな家族の方が、よっぽど多いだろう。3世代の交流なんかも、めっきり少ない。私たちよりも上の世代でも、近所付き合いの煩わしさから、町内会を抜ける人が多くなっている。これらに伴って、両親以外の大人と子どもが接する機会は圧倒的に減った。「では勉強でも...」と受験に打ち込みたくても、都会ほど情報がある訳でもなく、塾だって選択肢が少ない。水戸までの交通費も高い。当然に同世代の子どもの人数が少ないから、人に揉まれていない。

つまり、田舎の子どもの方が都会の子どもよりも

- ・自然と戯れていないし、外でも遊ばない
- ・大人はもちろん、同世代の人にも、揉まれていない
- ・チームで何かをするにも、子どもの人数が少なくて選択肢が少ない
- ・勉強するにも、情報が少ない（リテラシーも低い）し、選択肢も少ない

だから、田舎の子どもは、都会の子どもよりも圧倒的に知識も経験も少ない状況が作り出されようとしているのだ。

◆自分への戒めとメッセージ：子ども達に何を残すのか

議員を辞めて次の仕事として考えていることは、塾の経営。先ほど列挙した課題を少しでも解消するための「モデルづくり」をしたいと思っている。塾の名前は、【まなび舎 Gift—「いきる力」を育む自学自習室】に決めた。「Gift=神から与えられた才能」を活かして生きていく子ども達や大人たちの輪を広げたい。ましてや時代は教育改革で PISA¹ 調査に対応する学力がより問われる時代。それに対応できるだけの学習の場が田舎には少ない。株式会社 Lifemark&Gift を立ち上げた時から構想していた「学び方」自体を

教える塾を実践し、加えて社会課題の解決も考えている。これには資金ばかりではなく、一緒に夢を描き、活動してくれる多くの仲間が必要だ。今回の選挙で得たものの1つは、この仲間が増えたことだ。これから人口が少なくなっていく時代だからこそ、人と人の繋がり大切さがより一層重要になってくるのだろう。

衰退していく日本の中でも、遅くいきっていく人材を地域で育てていきたい。



後援会の事務所前で、後援会の仲間たちとの集合写真（中央が著者）



著者が使用した選挙掲示板用ポスター



来年度から本格始動予定の塾のロゴ



塾のコンセプト等を記載した Mindmap (PC 用)

<https://www.mindmeister.com/map/2590289476?t=NtrkoCSW2M>

¹ PISA 調査 OECD で 2000 年から 3 年ごとに実施している調査。

義務教育修了段階（15 歳）において、これまでに身に付けてきた知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測る。読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの 3 分野に対して高等学校 1 年生を対象に調査。（参考：文部科学省 HP）